

## 論文

# 自発表現の日中対照研究

— 論文作成指導のために

飯 嶋 美知子

A Comparative Study on the Expressions of Unconscious Action  
in Japanese and Chinese  
— To Teach Writing Academic Papers

IJIMA Michiko

### 1. はじめに

日本語の論説文においては、筆者の意見を表す「～と思われる」、「～と考えられる」等の自発表現<sup>(1)</sup>が多用される。だが、中国語を母語とする日本語学習者は、レポートや卒業論文等の文章作成時に「～と思う」等の能動表現を使用し、自発表現を十分に使用できないことが多い。以下は、中国語を母語とする日本語学習者が書いた論文から収集した例である。

- (1) 台湾人日本語学習者が擬音語・擬態語を学習する時、次の困難点があると思う<sup>(2)</sup>。(台湾・大学院生・20代・女性)
- (2) 教科書や教育現場での説明不足により、「わけた」の意味機能が

十分に説明されず、より詳しい文法解析と練習のやり取りが必要だと想定する。(河南省・大学院生・20代・女性)

(1)、(2)の下線部のような表現を用いると、論文筆者の主観的判断が前面に感じられ、論文として不自然な印象を受ける。下線部を自発表現に改めた方が、論文にふさわしい表現になると思われる。(1)、(2)を改めると、以下(1)'、(2)'のようになる。

- (1)' 台湾人日本語学習者が擬音語・擬態語を学習する時、次の困難点があると思われる。
- (2)' 教科書や教育現場での説明不足により、「わけだ」の意味機能が十分に説明されず、より詳しい文法解析と練習のやり取りが必要だと想定される。

中国語を母語とする日本語学習者が、自発表現ではなく能動表現を多用する理由としては、まず、自発表現が論説文で使用される理由が、十分理解されていないことが考えられる。また、論説文における表現形式が、日本語と中国語では、異なることが推測される。

以上の2点を明らかにするために、本研究ではまず、自発表現が論説文で使用される理由について考える。続いて、日本語の論説文から自発表現の用例を収集し、対応する中国語表現を調査し、日本語と中国語の表現の相違点を追究する。最後にその結果を踏まえ、日本語学習者への指導法を提案する。

## 2. 論説文で自発表現が使用される理由

自発表現について、杉本（1988：217）は、以下のように述べている。

焦点を大きくとれば、自発は無意志表現の一種である。より厳密に言えば、自発は無意志化表現である。意志によって制御されてしかるべき人の動作・心的作用が制御されずにひとりでの生じてしまう事態を表す。

また、森田（2002：210）は、「外の情勢から、自ずとそのように思われる」と述べ、(3)の例文を挙げている。

(3) どうも機は遭難したものと考えられる。(森田2002：209)

以上の点から、日本語の論説文において、自発表現が使用されるのは、根拠のない断定を避け、「論を進めれば自然と～という意見になる」、「～という意見になるのが自然だ」<sup>(3)</sup> ということを表現するためであると考えられる。日本語学習者への文章作成の指導の際には、この点をまず説明しておく必要がある。

以上、日本語の論説文において、自発表現が多用される理由について述べた。次節では、日本語の論説文中の自発表現の用例の、中国語との対応関係について検討する。

### 3. 自発表現に対応する中国語表現

#### 3-1. 調査方法及び調査対象

本節では、日本語の論説文中の自発表現に対応する中国語表現を調査していく。調査対象として、日本語を原文とし、中国語訳を持つ論説文から、自発表現の用例を収集した。用例を論説文からのみ収集したのは、ここで使用されている自発表現が、文章作成時に使用される用法と同様であると判断したためである。

以下は、用例を収集した論説文の出典であり、[ ]及び《 》内に1文

字が記されているのは、各出典の略称である。下記のうち、「日本経済の飛躍的な発展」、「心の危機管理術」、「近代作家入門」、「日本列島改造論」は、北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス』第一版によるものである。

- [日]『日本語 新版』（上）（下）金田一春彦（1988）岩波書店  
《日》《日语概说》潘钧訳（2002）北京大学出版社
- [森]『森の日本文化 縄文から未来へ』安田喜憲（1996）思索社  
《森》《森林——日本文化之母》蔡敦达、邬利明訳（2002）  
上海科学技术出版社
- [飛]「日本経済の飛躍的な発展」  
《飞》《日本经济的腾飞》
- [危]「心の危機管理術」  
《哲》《顺应自然的生存哲学》
- [列]「日本列島改造論」  
《列》《日本列岛改造论》

なお、中国語では主節と連体修飾節ではテンス・アスペクト表現が異なるため<sup>(4)</sup>、ここでは主節部分に使用されている用例のみを取り上げる。また、否定文や、「テイル」以外の表現が併せて使用されている用例は、調査の対象外とした<sup>(5)</sup>。

### 3-2. 収集用例に対応する中国語表現

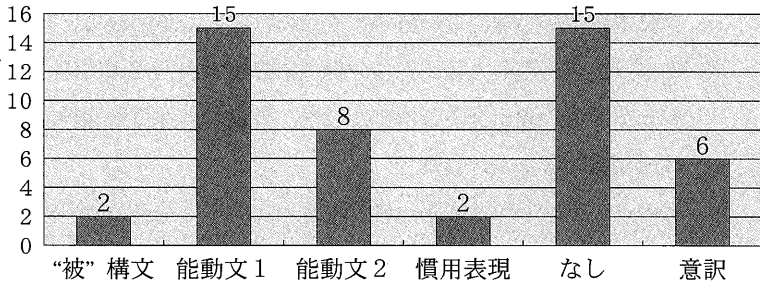
植田（1998）では、自発表現が使用される動詞を、「感じる、思い出す、惜しむ、案じる等」の「感情・心情を表す動詞」と、「思う、考える、想像する、推定する」等の「思考・判断を表す動詞」に大別している。本研究ではこの分類に従って分析する<sup>(6)</sup>。

調査資料からは、「感情・心情を表す動詞」の用例が14、「思考・判断

を表す動詞」の用例が71収集された。また、後者のうち48例は、引用の助詞である「と」と併用されていた。論文では「～と思われる」等の「～と～」の形式で用いられることが多いため、本研究では「思考・判断を表す動詞」のうち、「～と～」の形式で用いられている例を分析する。

中国語への訳され方は、「被”構文」、主語の明記されている能動文（以下、「能動文1」）、主語が省略されている能動文（以下、「能動文2」）、「慣用表現・固定表現」、自発表現に対応する部分がないもの（以下、「該当表現なし」）、「意識」の6つのパターンに分類された<sup>(7)</sup>。

【図1】「と」と併用の「自発表現」に対応する中国語表現



【表1】「と」と併用の「自発表現」に対応する中国語表現

中国語訳 摘要	“被”構文	能動文1	能動文2	慣用表現	該当表現なし	意 識	合 計
用例数	2	15	8	2	15	6	48
%	4.2	31.3	16.7	4.2	31.3	12.5	100

【図1】及び【表1】を見ると、「と」と併用されている自発表現は、中国語では、「能動文1」が15例（31.3%）、「能動文2」が8例（16.7%）、「該当表現なし」が15例（31.3%）というように、「能動文1」、「能動文2」に訳されるか、該当表現が省略されて訳されることが多いことがわかる。また、「能動文1」と「能動文2」の合計は23例（47.9%）であり、半数近くが能動文に訳されていることになる。以下、特に用例の多く収集

された、「能動文1」と「該当表現なし」について、分析していく<sup>(8)</sup>。

### 3-3. 「能動文1」に対応する中国語表現

まず、「能動文1」に対応する中国語表現について検討する。

- (4) アジア経済が伸びた直接のきっかけは、日本と中国にあると思われる。[飛]
- (4)' 我认为亚洲经济能够发展的直接原因还是在于日本和中国。《飞》
- (5) もし、国内で行われているパーセントを分母とし、国外で行われているパーセントを分子として分数を作ったら、世界の国語の中で日本語ぐらい零に近い値を示すものはないと思われる。[日]
- (5)' 如果以国内使用的人数比例作分母，国外使用的人数比例作分子构成分数的话，我想世界各国语言当中，再也没有像日语这样显示出接近零值的语言了。《日》
- (6) 世の中、すべて因果応報、自分のまいたタネは手の自分で刈るよりほかはないと思われる。[危]
- (6)' 我不禁感到：人世间的一切都贯穿了“因果报应”的道理。自己种下的苦果，只有自己去吞咽。《哲》

(4)'～(6)'は、「能動文1」に訳されている例である。すべて主格を表す“我”（私）が補われ、能動文となっている。(4)'は“我认为”（私は～と思う）、(5)'は“我想”（私は～と思う）という、能動文に訳されている<sup>(9)</sup>。(6)'も能動文であるが、“不禁”（思わず～にはいられない），“感到”（感じる、思う）という表現が使用されており、“我不禁感到”（私は～と感じずにはいられない）となっている。「～と思われる」を、書き手の判断とは解釈せず、「自然にそのような感情に流された」ものとして、自発表現を中国語に反映させたものと思われる。

ここで、日本語と中国語の、思考及び判断を示す表現の相違を検討す

るため、中国語を原文とし、日本語に訳されている用例との比較を試みる<sup>(10)</sup>。

- (7) 这个封面不知是由谁人设计的，但我认为它极好地表现出了旅法中共党员和青年团员们的风貌和气质。《我的父亲邓小平》
- (7)' 誰がデザインしたのか私は知らないのだが、在仏中共黨員、青年団員の気風をよく伝えていると思う。「わが父・鄧小平」
- (8) 可是，我想大多数的日本人同我一样，对于这两个人，均是一无所知。《中日飞鸿》
- (8)' しかし、多くの日本人は私同様、この2人に関して、なにも知らないと思う。「日中飛鴻」
- (9) 他们自称去克鲁梭市工作。我怀疑他们是去打工。  
《我的父亲邓小平》
- (9)' クルーズ市に仕事に行くというのが、肉体労働ではないかと思われる。「わが父・鄧小平」
- (10) 我访问时的两届在校学生如今已毕业十多年了。估计他们现在都工作在经营与研究开发的第一线。《中日飞鸿》
- (10)' 私が訪問したとき、(シンセン大学に在籍していた) 1期生、2期生は今、卒業してほぼ10年、ビジネスや研究開発の最前線にいると思われる。「日中飛鴻」
- (11) 新险种的登台亮相使日本的保险变得复杂起来，预计今后还会更加复杂。《中日飞鸿》
- (11)' 新商品の登場で日本の保険は複雑になり、今後ますます複雑になってゆくと思われる。「日中飛鴻」
- (12) 对李明瑞，我们当然不好怎样还存幻想，但是现在，在左江我们主观的力量还不够赶走他，而以为暂时利用他的线索去发动其下层群众工作也不是不可以的。《我的父亲邓小平》
- (12)' われわれは当然ながら、李明瑞に対していかなる幻想も持つべき

ではない。しかし現在史料するに、左江のわれわれの力量は李を追放するまでには至っていない。それにしばらくは李の敷いたルートを利用し下層大衆に対する工作を行なうこともできると思われる。「わが父・鄧小平」

(7)～(9)は主語が明示された能動文、(10)～(12)は主語が省略された能動文であり、(7)～(12)は、構文的にはすべて能動文という同一構造だと考えられる。しかし、(7)、(8)と、(9)～(12)は、使用されている動詞が大きく異なっている。

(7)は“我认为”(私は～と思う)、(8)は“我想”(私は～と思う)が使用されている例である。いずれも、書き手の判断が明確に文中に表されている。日本語訳も、「私は～と思う」と、主語である「私」を明示した形の能動文となっている。

(9)～(12)は、日本語訳が「～と思われる」とされている用例である。中国語の原文を見てみると、(9)は“我怀疑”(私は～と推測する)、(10)は“估计”(推定する)、(11)は“预计”(見通す)という動詞が使用されている。いずれも、断定の度合いが低い表現である。(12)の“以为”は、“认为”とほぼ同義で「思う、考える」の意味であるが、“以为”の方が、控えめな判断を表すという点で異なる。

中国語では、書き手の判断を示す際は、主語の“我”を明示するとともに、動詞“认为”や“想”が使用されることがわかる。

(13) 「が」と「は」は、一般に、ともに主格を表わす助詞と考えられている。[日]

(13) ‘が’和‘は’ 一般被看作 同是表示主格的助词。《日》

(14) このような知識集約型の工業立地は、高度な技術者を必要とするだけに都市集積とは切離せない。そのため国際貨物空港と臨空港工業地帯の候補地は太平洋ベルト地帯、とくに伊勢湾か駿河湾が



候補地と考えられている。[列]

- (14) ' 一般认为, 充分运用人类智慧和知识的工业地区, 需要高级技术人员, 因此, 与城市的集结不能分开, 国际货物机场和机场附近工业地区的理想地点, 以太平洋沿岸地区, 特别是伊势湾和骏河湾为宜。《列》

自発表現に「テイル」がつくと、書き手以外の一般の意見が表される<sup>(11)</sup>。(13)、(14)はその例である。中国語では“一般被看作”(一般に〜と見なされる)、“一般认为”(一般に〜と思われる)のように、“一般”を明示しており、原文で一般の意見が述べられていることを訳に反映させている。

### 3-4. 「該当表現なし」の用例

続いて、自発表現が、中国語訳に反映されていない用例を検討する。

- (15) そこであの熱いのは「湯」だ、この冷たいのは「水」だ、と区別したものと想像される。[日]
- (15)' 于是, 他们就**把热的叫做“湯”, 把凉的叫做“水”, 以示区别**。  
《日》
- (16) 人々はブナ林に囲まれて、ヒシの実を採ったり、ドングリ類を採集し、狩猟を行っていたと思われる。[森]
- (16)' 在水青冈森林环绕的居住地, 人们采摘菱角或橡树类果实, 并外出狩猎。《森》
- (17) 近世中頃以降の綿などの商品作物の導入は、林地の荒廢に拍車をかけたとみられる。[森]
- (17)' 近代中期以后, 棉花等商品作物的引进加速了林地的荒芜。《森》

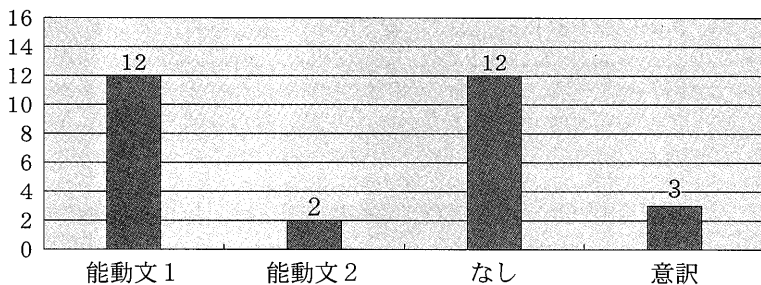
(15)', (16)', (17)' は、自発表現に該当する表現が見られない、「該当表現

なし」の例である。(15)'～(17)'を日本語にすると、(15)'は、「そこで、かれらは熱いものを「湯」、冷たいものを「水」と呼んで区別したのである。」、(16)'は、「ブナ林に囲まれた居住地で、人々はヒシの実やドングリ類を採集し、狩猟を行っていた。」、(17)'は、「近世中期以降、綿などの商品作物の導入が、林地の荒廃を加速させた。」となる。いずれも、日本語の原文に記されている、書き手の判断を表す(15)の「～と想像される」、(16)の「～と思われる」、(17)の「～とみられる」という自発表現は、中国語の訳に反映されておらず、単に事実のみを述べる文となっている。これは、訳者が自発表現を、形式的に付加された表現とみなしたのではないかと思われる。すなわち、自発表現は、実質的には意味を持たず、訳に反映させる必要がないと判断したためであると考えられる。

### 3-5. 「～と思われる」、「～と考えられる」に対応する中国語表現

収集した用例のうち、書き手の判断を述べる表現として使用される、「～と思われる」、「～と考えられる」の用例数は29で、「と」と併用されている「思考・判断を表す動詞」の約60%を占めていた。その使用頻度が高いことがわかる。

【図2】「と思われる」、「と考えられる」に対応する中国語表現



【表2】「～と思われる」、「～と考えられる」に対応する中国語表現

中国語訳 日本語表現	能動文1	能動文2	該当表現なし	意 訳	合 計
思われる	8	0	12	2	22
考えられる	4	2	0	1	7
合 計	12	2	12	3	29
%	41.4	6.9	41.4	10.3	100

中国語への訳され方は、【図2】及び【表2】の通り、「能動文1」と「該当表現なし」に大別される傾向がさらに顕著であった。また、「能動文1」に訳されている場合、その訳は“我认为”、“我想”等となっており、訳はほぼ固定的なものであった。

### 3-6. 分析とまとめ

以上、「と」と併用されている「思考・判断を表す動詞」の自発表現に対応する中国語表現を見てきた。自発表現は、主格を明示した能動文、あるいは該当表現なしという形で訳される場合が多いことがわかった。ことに、論説文で書き手の判断を述べる際には、主格である“我”を明示することが多いことが明らかとなった。これは、基本的には書き手を明示しない、日本語の論説文とは、表現形式が大きく異なる点である。

なお、書き手の判断を示す表現として頻出する、「～と思われる」、「～と考えられる」は、“我认为”、“我想”のように、中国語訳も固定化していた。日本語でも中国語でも、固定化したフレーズであると考えられる。

以上、日本語の論説文中の自発表現の用例と、中国語表現との対応状況について分析した。次節では、これらの結果をふまえ、中国語を母語とする日本語学習者への指導について考える。

#### 4. 日本語学習者への指導法の提案と今後の課題

日本語の教科書では、自発表現に関しては、初級後半に提出されるものの、「見える」、「聞こえる」等の知覚動詞が中心で<sup>(12)</sup>、「思う」、「考える」等の「思考・判断を表す動詞」についての使用法が説明されているのは、中上級用の教材である<sup>(13)</sup>。論作文の書き方を説明する教材においては、自発表現が論作文で使用される理由が示されているものもあるが、その使用例としては、「～と思われる」、「～と考えられる」等、使用頻度の高い例を示すにとどまっております<sup>(14)</sup>、これだけでは不十分であると思われる。

中国語を母語とする日本語学習者への、レポート、論文等の作成指導に際しては、まず、自発表現が論説文に使用される理由を理解させる必要がある。自発表現は、個人の主観による結論や、根拠のない判断をさげ、客観的に分析した結果、そのような結論が導かれたことを示す表現であることを説明する。

書き手の判断を表す「～と思われる」、「～と考えられる」等、論説文に頻出する表現は、固定化したものとして提示することも効果的であるが、それに加え、「推定する、推測する、想定する、解釈する、判断する<sup>(15)</sup>」等の「思考・判断を表す動詞」を、一覧表にして提示することも有効であると考えられる。学習者にこれらの動詞を用いて文作りをさせたり、学習者のレベルによっては、逆に、敢えて動詞は提出せず、「思考・判断を表す動詞」にはどのような動詞があるのかを考えさせる、という指導法も考えられる。

続いて、日本語と中国語の、表現形式の相違についての説明も必要である。中国語では、書き手の判断を示す際、主語を明示した能動表現を用いる。それに対し、日本語では、自発表現が多用されることを説明する。表現形式の相違を認識させることで、日本語での文章作成の際、能動表現を用いるという誤用は大幅に減少するものと思われる。自発表現が使用されている論説文を教材として使用し、日中対訳を示し、日本語と中国語の表

現形式の相違を解説する、という指導法が効果的であると思われる。今回の用例収集の調査対象とした『日本語 新版』(上)(下)<sup>(16)</sup>は、日本語について幅広く論じている内容であるため、教材としても使用できる。

今後は、上記の指導案を教育現場で実践し、その効果を確認していきたい。また、さらに多くの資料からより多くの用例を収集し、データを充実させていきたい。

## 【注】

- (1) 石黒 (2004) のように、「～と思われる」、「～と考えられる」等を「自発表現」ではなく「モダリティ形式」であるにとらえる説もあるが、本研究では「自発表現」として扱う。
- (2) 例文中における下線は全て筆者が記したものである。
- (3) 浜田ほか (1997) P3を参照。
- (4) 木村 (1982) は、「時間に関して無標 unmarked の動詞述語は、主節においては、一般に未然の動作・作用を示す傾向にあるが、連体修飾節にあたっては、事情が逆転して、それは已然を指す傾向が強くなる」と述べている。詳細は木村 (1982) P28を参照。
- (5) 「ノダ」、「テクル」等、他の表現が付属して使用されている例は、自発表現部分以外の要素が中国語訳に反映されてくる可能性が高いため、分析対象外とした。なお、中国語訳には過去の標識が表されないため、過去を表す「夕」が付属しているものについては、分析対象として扱っている。また、「テイル」は書き手以外の一般の意見を示す場合が多いため、分析対象としている。
- (6) 植田 (1998) P111を参照。
- (7) 本研究における中国語の文法用語は、刘ほか (1991) による。「被」構文」とは、中国語の受身のマーカーである“被”または“叫”、“给”等の介詞(日本語の助詞にほぼ相当)が使用されている、受動文のことである。
- (8) 能動文とは、動作の主体に焦点が置かれた、「主語+動詞+目的語」の語順となっている文である。「能動文2」は、その主語が省略されているのみで、構文的には「能動文1」と同様と考えられるため、本研究においてはその用例の分析例は取り上げない。
- (9) “认为”及び“想”は、いずれも「思う、考える」と訳されるが、“想”が感想から意見を述べるに至るまで、広く使用されるのに対し、“认为”は、意見や判断を述べる際に使われ、論説文等で使用されることが多い。
- (10) 《我的父亲邓小平》、「わが父・鄧小平」、《中日飞鸿》、「日中飛鴻」は、北京日本学術センター (2003) 『中日対訳コーパス』第一版によるものである。いずれも日本語では「～である」という常体に訳されているため、比較対象として取

り上げた。

- (11) 森田 (1977) P473を参照。
- (12) スリーエーネットワーク (1988) 『みんなの日本語』の27課、鈴木・川瀬 (1981) 『日本語初歩』の23課、国際学友会日本語学校 (1994) 『進学する人のための日本語初級』の6課を参照。
- (13) 友松ほか (2007) 『どんな時どう使う 日本語表現文型辞典』P416を参照。
- (14) 浜田ほか (1997) P3を参照。
- (15) 「思考・判断を表す動詞」の用例は、佐藤・仁科 (1997) P64を参考にした。
- (16) 『日本語 新版』(上)(下)の詳細については、本稿P72の3-1「調査方法及び調査対象」の用例出典一覧を参照。

## 【参考文献】

- 相原 茂・石田知子・戸沼市子 (1996) 『Why? にこたえるはじめての中国語の文法書』 同学社
- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2001) 『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』 アルク
- 飯嶋美知子 (2006) 「自発表、受身表現の日中対照研究－日本語の論説文における用法とその指導－」 2006'清華大学日本語文化国際フォーラム予稿集 pp.133-134.
- (2007) 「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究－中国語母語話者への教育の一環として」 『早稲田大学日本語教育研究』 10 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.17-30
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 石黒 圭 (2004) 『よくわかる文章表現の技術Ⅰ－表現・表記編－』 明治書院
- 植田瑞子 (1998) 「「自発」表現の一考察－自発文の二系列－」 『日本語教育』 96号 日本語教育学会 pp.109-120
- 大河内康憲 (1982) 「中国語の受身」 『講座日本語学10 外国語との対照Ⅰ』 明治書院 pp.319-332
- 木村英樹 (1982) 「テンス・アスペクト－中国語－」 『講座日本語学』 明治書院 pp.19-39
- 国際学友会日本語学校 (1994) 『進学する人のための日本語初級』 国際学友会
- 佐藤勢紀子・仁科浩美 (1997) 「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」 『日本語教育』 93号 日本語教育学会 pp.61-72
- 杉本和之 (1988) 「現代語における「自発」の位相」 『日本語教育』 66号 日本語教育学会 pp.217-228
- 杉村博文 (1991) 「遭遇と達成－中国語被動文の感情的色彩－」 大河内康憲編 (1997) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 くろしお出版 pp.277-294

- 鈴木 忍・川瀬生郎 (1981) 『日本語初歩』 国際交流基金日本語センター  
スリーエーネットワーク編 (1998) 『みんなの日本語』 初級Ⅱ本冊 スリーエー  
ネットワーク  
寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』 第Ⅰ巻 くろしお出版  
友松悦子・宮本 淳・和栗雅子 (2007) 『どんな時どう使う 日本語表現文型辞  
典』 アルク  
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワーク  
ブック』 くろしお出版  
森田良行 (1977) 『基礎日本語』 1 角川書店  
—— (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房  
刘月华・潘文娛・故韓著／相原茂監訳 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 くろ  
しお出版

(本学経営学部非常勤講師)